

## PT、OT、ST等の外部専門家を活用した指導方法等の改善に関する実践研究事業中間報告書

### 1 研究のねらい

長崎県の肢体不自由児特別支援学校では、平成19年度において70.1%の児童生徒が重複障害児学級に在籍するなど、障害の状態が重度・重複化、多様化してきている。そのため、教員は障害の状態及び特性等の的確な実態把握に基づいた指導が必要となり、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成する力や、それに基づいた授業をできる力等、教員の専門性が高く求められている。

文部科学省から本事業の委託を受けた長崎県教育委員会は、本事業の趣旨をふまえ、設置状況の異なる諫早養護学校と長崎養護学校に研究を指定することにした。

諫早養護学校は、隣接する病院や施設はないが、小・中学部、高等部に各1名ずつ自立活動専任教員を配置し、自立活動に関する研修等の運営や情報の収集・発信、教材・教具の開発等を行い、教員の指導の充実や専門性の向上を図っている。

長崎養護学校は、病院や重症心身障害児（者）入所施設に隣接した学校であり、施設から通学している児童生徒の状況については、PT、OT、ST等の外部専門家（以下、「外部専門家」という。）による助言を得たり、情報交換等を行ったりしやすい環境にある。

両校には、「障害のある子どもの医療サポート事業」により看護師が配置されており、保護者を含め、医療的ケアや自立活動の指導等に対する期待が大きい学校である。しかし、全ての教員が自立活動の指導を十分に理解し、また、各教科等と関連づけた指導が十分に実施されているとは言い難く、外部専門家を導入することで、より質の高い専門性を身につけた教員の育成が期待できるものである。

### 2 研究内容

外部専門家の活用によって、次の3つの仮説と4つの具体的な内容についての成果を期待して実践研究を行うことにした。

#### <仮説>

- 1) 教師がもっておかねばならない専門性について改めて考え、現在の肢体不自由児を教育する特別支援学校の教育に求められていることを認識することで、教育活動を充実させられるのではないかと。
- 2) 外部専門家を活用しながら、専門的な視点からの実態把握やかかわり方、知識、技術を学ぶことで、より一人ひとりの児童生徒に応じた適切な指導ができ、個別の指導計画の目標を達成していくことができるのではないかと。

- 3) 外部専門家との連携の在り方をおして、児童生徒の教育的ニーズを的確に捉え、個別の教育支援計画のより円滑で有機的な活用と運用につなげられるのではないか。

< 具体的内容 >

<p>○「計画する力」を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実態把握の妥当性が高まる。</li> <li>・指導目標設定の妥当性が高まる。</li> <li>・学習内容の選択や段階を踏んだ指導が適切なものとなる。</li> <li>・指導結果の評価の信頼性が高まる。</li> </ul>	<p>○「実践する力」を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導方法等の改善・充実を図る。</li> <li>・主体的な活動を引き出す。</li> <li>・指導中の事故を防ぐ。</li> <li>・障害の進行や二次障害を防ぐ。</li> </ul>
<p>○「チームアプローチ機能」を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師集団の知識、技能が高まる。</li> <li>・児童生徒の指導を様々な観点から検討することができる。</li> <li>・他職種との意思疎通能力が高まる。</li> </ul>	<p>○「環境としての学校の力」を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・補助器具や学校設備等の改善のヒントが得られる。</li> <li>・家庭療育についての助言のヒントが得られる。</li> </ul>

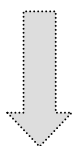
### 3 評価の方法

指定校の研究及び実践の深化・充実を図るため、外部専門家活用指導充実実践研究事業推進会議設置要項を定め、長崎県教育委員会教育長が委嘱した推進委員（国家試験により免許を受けた療法士等、大学等の学識経験者、特別支援学校関係者、県教育委員会職員）による推進会議において、研究の目的や計画、内容、課題等について、指導、助言、評価を受けることとした。

### 4 研究経過

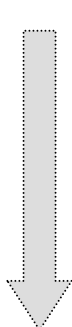
#### 1) 校内体制づくり

##### 1. 外部専門家活用事業のねらいを校内で周知



指導方法等の改善・充実を図るために、外部専門家を活用してさまざまな知識や技術を学び、教員一人ひとりの専門性を高める。

##### 2. 外部専門家の選定



ア ねらいをもとに校内のニーズを把握する。  
 イ 県教育庁や学校長、管理職などの助言を得ながらすすめる。  
 ウ 公立施設に所属する外部専門家は、謝金の関係上、事業参画が難しい。  
 エ 本事業のねらいと実施頻度などについては、事前にある程度外部専門家に知らせておく必要がある。

オ 電話番号、FAX番号、メールアドレスなどをやりとりし、連絡のとりやすい手段と時間帯を尋ねておく。

### 3. 外部専門家の決定

ア 外部専門家に承諾をもらう。  
イ 県教育庁へ決定を連絡する。(その後、県教育庁から各外部専門家へ依頼状が送付される。)  
ウ 学校の年間日程と照合しながら、年間の実施日時の素案を作成する。  
エ 各外部専門家との連絡調整役を決定する。

### 4. 事業説明会への参加案内

ア 各外部専門家に対して、校内がめざす研究目的等を説明する。  
イ 複数の外部専門家が参画する場合、相互が顔を合わせる機会とする。  
ウ 謝金関係の書類等を準備しておく。  
エ 年間の実施計画を作成しておく。

### 5. 事業説明会の実施

ア 学校長をはじめとする管理職及び各外部専門家との連絡調整役が出席する。  
イ 事業のねらいや内容、方法及び日程を伝える。  
ウ 学校で作成・運用している個別の指導計画や個別の教育支援計画及び自立活動の内容について説明する。  
エ 各外部専門家と質疑応答する。

### 6. 事業スタート

ア 計画した日程に沿って事業を実施する。  
イ 来校される日時については、校内全体で周知しておく工夫をする。  
ウ 専門家が待機できる場所や対応する者をはっきりとさせておく。  
エ 何かあったときには、すぐに各外部専門家と各連絡調整役とのやりとりができるようにしておく。

### 7. 各専門家との事業のまとめ

ア 年間計画にまとめの日程も位置づけておく。  
イ 学期ごとを目安に活用事業の流れのまとめ(評価)を行う。  
ウ 単なる実施したことの羅列にしてしまうのではなく、事業のねらいの達成度合いや各外部専門家と協議したい中身を事前に知らせておく。

### 8. 学校全体での事業のまとめ

ア 各外部専門家とのまとめを受け、学校全体の事業のまとめを行う。

イ 基本的には、参画してもらったすべての外部専門家に出席してもらう。  
 ウ おおよその内容やコメントをもらいたい中身については事前に知らせておく。

9. 次年度に向けて

ア 学校全体としてのまとめを受けて、次年度の事業実施の有無、ねらい、外部専門家の決定、実施方法などを明らかにする。

2) ニーズ調査

外部専門家を選定するにあたり、両校で外部専門家活用に関する職員のニーズについてのアンケート調査を実施してもらった。その結果、外部専門家を活用して高めたい専門性については、概ね以下のとおりであった（表1）。

職	カテゴリー	具体的内容
作業療法士	アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感覚入力や運動機能についての実態把握</li> <li>・社会性や社会適応に関することの実態の把握</li> </ul>
	日常生活動作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食事動作や排泄動作、書字動作と姿勢との関連</li> <li>・ファスナーやボタンなどの衣服の着脱に関すること</li> <li>・目と手の協応や両手の協応</li> <li>・片まひの児童生徒のまひ側の活動</li> </ul>
	ボディイメージや運動企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大型遊具への乗り移りや降りること</li> <li>・座位や立位でのバランス保持</li> <li>・大型遊具の動きを利用したのヘッドコントロール</li> <li>・電動車椅子操作における空間位置把握</li> </ul>
	手指の巧緻動作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物を握ったりはなしたりする際の各部の動き</li> <li>・指先でつまんだりはいじったりする動き</li> </ul>
	社会性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れ物の予防や身だしなみに関すること</li> <li>・教師の指示のあり方（言語指示だけに頼りすぎてないか）</li> <li>・作業時の迅速性、正確性、持続性、効率性に関すること</li> <li>・余暇につながる指導の工夫に関すること</li> </ul>
理学療法士	心理的な安定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高まった感情のコントロールに関すること</li> </ul>
	アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動機能についての実態把握</li> <li>・生活と姿勢や運動との関連性</li> </ul>
理学療法士	姿勢管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒の体幹等のねじれや反りに応じた教材の工夫</li> <li>・活動肢位と安静肢位との役割の明確化</li> <li>・呼吸をはじめとする健康面との関連</li> <li>・低緊張児の姿勢保持と移動</li> </ul>

	基本的な身体への働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働きかける強さや方向、速さ</li> <li>・子どもの動きの感じとり</li> <li>・姿勢変換の際の重心の移動のさせ方</li> </ul>
	座位や立位	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの姿勢の意義</li> <li>・姿勢における体重の支持と移動の重要性</li> <li>・キーとなる頭、肩、股関節、膝、足底への働きかけ方</li> <li>・立位台などの補助具を使った時のサポートについて</li> </ul>
	移動や姿勢変換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支持脚と遊脚の動きと働きかけ方</li> <li>・ウォーカーやクラッチなどの補助具を使った時の援助の仕方や配慮すべきこと</li> <li>・姿勢変換のチャンスを的確に把握しての立ち上がりや座り込み</li> <li>・生活の拡大につながっているかどうかの視点</li> </ul>
言語聴覚士	アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語理解や意思伝達についての実態把握</li> <li>・コミュニケーションと姿勢との関連性</li> </ul>
	発声や発語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発語時の口唇や舌の動き</li> <li>・呼吸のコントロールや息つぎの仕方</li> <li>・写真や絵などに示されたものの理解や表出</li> </ul>
	見ることや聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の声や接触への気づきや表出</li> <li>・人やものへの関心を引き出すかかわり方</li> <li>・外界への働きかけがしやすい姿勢や教材の提示の仕方</li> <li>・生活場面における言葉の意味理解</li> </ul>
	読むこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字の対応や読み</li> <li>・読みとばしや省略への対応</li> </ul>
	指示に応じた行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語指示と視覚的指示のそれぞれの特性</li> <li>・指示の伝え方と配慮すべきこと</li> <li>・児童生徒の成就感と達成感を感じやすくする課題の組立て</li> </ul>
	伝えること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自発的なサインや身振りを引き出すための工夫</li> <li>・要求行動を引き出す際の待ち方</li> <li>・語彙数を増やす取組</li> </ul>
歯科医師	アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・捕食、咀嚼、嚥下の発達段階の把握</li> <li>・口唇、舌、頬、顎、喉などの機能</li> </ul>
	食環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初期食、中期食、後期食のそれぞれの特性</li> <li>・適切な食形態の選定</li> <li>・食事と姿勢との関連性</li> <li>・適切な食具の選定</li> <li>・水分にとろみをつける理由</li> </ul>

	間接訓練	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脱感作の意義と方法</li> <li>・バンゲード法による筋訓練</li> <li>・唾液促通による嚥下訓練</li> </ul>
	摂食指導での働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食べる食材の声かけの重要性</li> <li>・捕食や嚥下の際の上唇や下顎への援助</li> <li>・体幹や頭部と座面との角度</li> <li>・一口量と食べ物を入れる場所、嚥下をしたことの確認</li> </ul>
他	福祉用具	・福祉用具の情報提供、購入の仕組み等

表 1

### 3) 外部専門家の選定

教員のニーズ調査を踏まえ、それぞれの学校で協働する外部専門家を次のように決定し、本事業を進めていくことになった（表 2）。

研究の進め方としては、在籍する児童生徒数が多い諫早養護学校では、個々の教育的ニーズに応じて構成された 5つのグループに外部専門家を 1名ずつ配置し、グループ研究を中心に取り組むことにした。また、在籍する児童生徒数が少ない長崎養護学校では、2名の外部専門家で全児童生徒を対象として、計画的、個別的に研究を進めることにした。

指定校	継続的に協働する外部専門家	研修等で活用する外部専門家
諫早養護学校	作業療法士（2名）、理学療法士、言語聴覚士、歯科医師	大学教授
長崎養護学校	作業療法士、理学療法士	歯科医師、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士

表 2

### 4) 各校の取組

#### 1. 諫早養護学校の取組

##### ア 研究の特徴

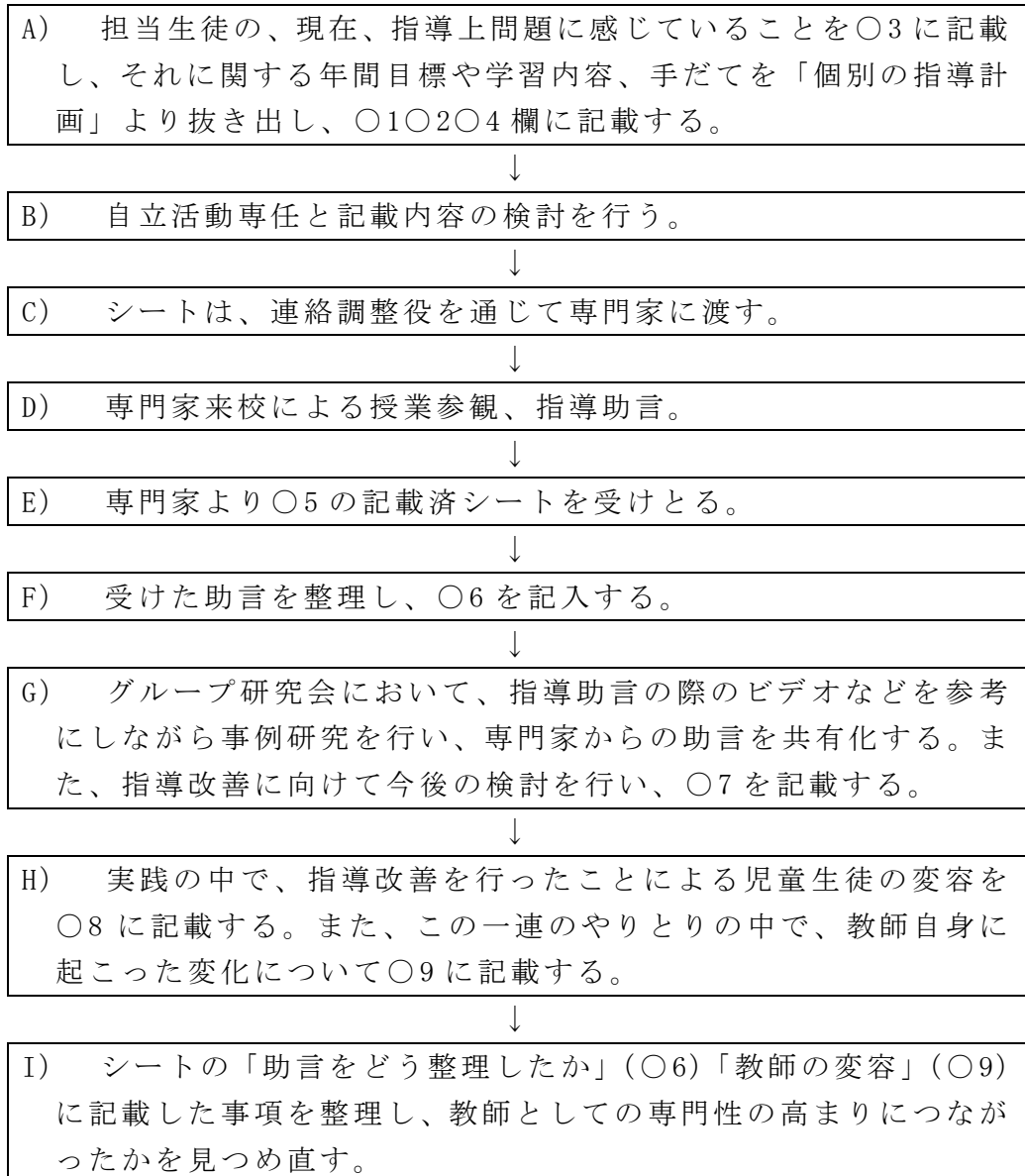
諫早養護学校では、外部専門家の手技という狭義に専門性を捉えることなく、外部専門家の専門的な視点を参考にした実態把握の観点、指導すべき内容の選択、効果的な手だての工夫、評価の視点等、教員の専門性として大切な要素の精度を高めるための研究にも取り組んだ。具体的には、パワーアップシート（以下、「シート」と言う）を校内共通の様式として作成し、各担任が個別の指導計画をもとに、指導助言を受けたい質問内容を整理する項目や、助言を受けて指導の改善・見直しをする項目、教師自身の変容について記入する項目を設け、教師としての専門性を自らが考えることができるように工夫した（表 3）。

児童生徒 氏名		主担当 氏名		担当専門家 氏名		初回助言 年月日	
------------	--	-----------	--	-------------	--	-------------	--

関連する年間目標	○1*「個別の指導計画」より					
学 習 内 容	○2*「個別の指導計画」より					
問題に感 じている こと（日 付）	行ってい る方法や 手だて （日付）	専 門 家 か らの助言 （日付）	助言を受け てどう整理 したか	修正した 方法や手 だて（日 付）	児童生徒 の様子や 変容	教師の 変容
○3	○4	○5	○6	○7	○8	○9

表 3

イ シート（表 3）作成の手順



フ  
イ  
ー  
ド  
バ  
ッ  
ク



J) グループ総括研究会  
・ 専門家からの助言のまとめ、成果と課題、次年度に向けて



K) 研究中間報告会  
・ 各グループのまとめの報告、研究全体としての成果と課題、次年度に向けて

ウ シートの取り扱いの留意点

A) 記入に関すること

児童生徒氏名のところは実名で記入する。学部、学年も記入のこと。郵送もしくは手渡しする際、シートに丸秘の判を押し、親展扱いにする。連絡調整役が取扱う。

B) 保存・保管に関すること

データはパスワードをかけて担任が保管・管理する。また、研究グループごとに記録用ファイルを作成し、そこにコピーを1部とり、担任以外の児童生徒のシートについてもいつでも閲覧できるようにする。

エ シート活用の実際

各外部専門家とのやりとりを諫早養護学校の全職員が行い、他職種との情報の共有や提示、伝達について経験をすることができた。単に、受けた助言をそのまま指導に取り入れるのではなく、自分自身の中で整理したり、自分が有する知識や技能と照らし合わせたりする貴重な機会となった（表4）。



児童生徒氏名	中学部3年 女子	主担当氏名	担当専門家名	大山 理学療法士	初回助言年月日	2008/10/22							
関連する年間目標	腰掛け座位での15分間の中で、玩具や絵本を見るために頭部を起こして数秒間保つ。												
学習内容	①原始反射が出にくい姿勢をとる。②緊張を緩める。③伏臥位で頭を動かす。④援助を受けて伏臥位を保つ。 ⑤肘立てで伏臥位で頭を起こす。⑥座位で頭部を一瞬でも起こす。⑦座位保持の補助具を使って自分で座る。												
問題に感じていること(日付)	<ul style="list-style-type: none"> <li>肘立てで伏臥位では、頭部が後屈姿勢が崩れてしまう。(09/30)</li> <li>腕に力を入れて頭部を起そうとすると、過緊張になり、上肢を後方へ反らしてしまう。(09/30)</li> </ul>	行っている方法や手だて	<ul style="list-style-type: none"> <li>座位をとるときは、充分に体幹や体側を伸ばしたりひねったりしてから行う。</li> <li>頭部を上げやすいように右脇と体幹を持ち上げるようにする。</li> <li>頭部が右側へ倒れてしまわないよう左側から声かけや玩具の提示をする。</li> <li>肘立てで伏臥位の際には肩から上腕にかけてしっかり支える。</li> <li>肘立てで伏臥位の際には、腰回りのねじれが出ないように三角マット等で固定する。</li> <li>箱椅子に座る際は後方から右脇と左体幹をしっかり支える。</li> </ul>	専門家からの助言(日付)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヘッドコントロールの目的ならば、座位での活動がいかも。</li> <li>伏臥位の際、腰が反りすぎると、腹部のかためのタオルを入れるなどの工夫が必要とされる。</li> <li>伏臥位は、四つ這い機がいいかも。</li> <li>足底で靴を履かせた方が踵がつかみやすい。</li> <li>座位保持椅子でのスウィッチ操作では、片手をできるだけ身体に近いところで支持するよう。</li> <li>安定のための足に重りを。</li> <li>チェイリーや三問表での評価を行っている。(以上10/22)</li> </ul>	助言を受けてどう整理したか	<ul style="list-style-type: none"> <li>肘立てで伏臥位の際には、股関節の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>伏臥位の際には、左右対称な姿勢になるようにマットやローンを調整する。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>	修正した方法や手だて(日付)	<ul style="list-style-type: none"> <li>股関節を屈曲させると、肘立ての際には、左右対称な姿勢になるようにマットやローンを調整する。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>	児童生徒の様子や変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>股関節を屈曲させることにより、右方向への動きが少なくなりました。</li> <li>そのため、上肢を後方へ反らさなくてもいいように調整しています。</li> <li>頭部を上げる際も、余計な力を入れないように調整しています。</li> <li>肘立ての際には、左右対称な姿勢になるように調整しています。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>	教師の変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>一部の箇所では、児童の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>肘立ての際には、左右対称な姿勢になるように調整しています。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>
関連する年間目標	腰掛け座位での15分間の中で、玩具や絵本を見るために頭部を起こして数秒間保つ。												
学習内容	①原始反射が出にくい姿勢をとる。②緊張を緩める。③伏臥位で頭を動かす。④援助を受けて伏臥位を保つ。 ⑤肘立てで伏臥位で頭を起こす。⑥座位で頭部を一瞬でも起こす。⑦座位保持の補助具を使って自分で座る。												
問題に感じていること(日付)	<ul style="list-style-type: none"> <li>肘立てで伏臥位では、頭部が後屈姿勢が崩れてしまう。(09/30)</li> <li>腕に力を入れて頭部を起そうとすると、過緊張になり、上肢を後方へ反らしてしまう。(09/30)</li> </ul>	行っている方法や手だて	<ul style="list-style-type: none"> <li>座位をとるときは、充分に体幹や体側を伸ばしたりひねったりしてから行う。</li> <li>頭部を上げやすいように右脇と体幹を持ち上げるようにする。</li> <li>頭部が右側へ倒れてしまわないよう左側から声かけや玩具の提示をする。</li> <li>肘立てで伏臥位の際には肩から上腕にかけてしっかり支える。</li> <li>肘立てで伏臥位の際には、腰回りのねじれが出ないように三角マット等で固定する。</li> <li>箱椅子に座る際は後方から右脇と左体幹をしっかり支える。</li> </ul>	専門家からの助言(日付)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヘッドコントロールの目的ならば、座位での活動がいかも。</li> <li>伏臥位の際、腰が反りすぎると、腹部のかためのタオルを入れるなどの工夫が必要とされる。</li> <li>伏臥位は、四つ這い機がいいかも。</li> <li>足底で靴を履かせた方が踵がつかみやすい。</li> <li>座位保持椅子でのスウィッチ操作では、片手をできるだけ身体に近いところで支持するよう。</li> <li>安定のための足に重りを。</li> <li>チェイリーや三問表での評価を行っている。(以上10/22)</li> </ul>	助言を受けてどう整理したか	<ul style="list-style-type: none"> <li>肘立てで伏臥位の際には、股関節の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>伏臥位の際には、左右対称な姿勢になるようにマットやローンを調整する。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>	修正した方法や手だて(日付)	<ul style="list-style-type: none"> <li>股関節を屈曲させると、肘立ての際には、左右対称な姿勢になるようにマットやローンを調整する。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>	児童生徒の様子や変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>股関節を屈曲させることにより、右方向への動きが少なくなりました。</li> <li>そのため、上肢を後方へ反らさなくてもいいように調整しています。</li> <li>頭部を上げる際も、余計な力を入れないように調整しています。</li> <li>肘立ての際には、左右対称な姿勢になるように調整しています。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>	教師の変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>一部の箇所では、児童の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>肘立ての際には、左右対称な姿勢になるように調整しています。</li> <li>座位保持椅子での活動の際、頭部の動きがスムーズに動かすことができました。</li> <li>右足が浮いてしまっているのを、接地面から離れさせて安定させる。</li> <li>肘立てを利用して右体幹を上げると、腕と胸との間に隙間ができてしまっている。肘立ての高さを調整して腕を胸にひきつけやすくする。</li> </ul>

## 2. 長崎養護学校の研究の特徴

### ア 研究の特徴

長崎養護学校では、外部専門家の活用を「個別助言」と「専門研修」に大別している。個別助言は外部専門家が来校し、実際の指導場面の中で助言を行うものである。

個別助言を効果的に進めるために、「個別助言まとめシート（以下、「シート」と言う）」を校内共通の様式として用いている。内容は「助言を得たい課題」「本児の学習のねらい」「外部専門家の助言」「指導の改善点」「児童の変容と課題」の項目欄で構成されている。このシートを用いて助言と指導をPDCAサイクルに乗せて指導の充実に結び付けようとした（表5）。

#### <個別助言まとめシートをツールとしたPDCAサイクル>

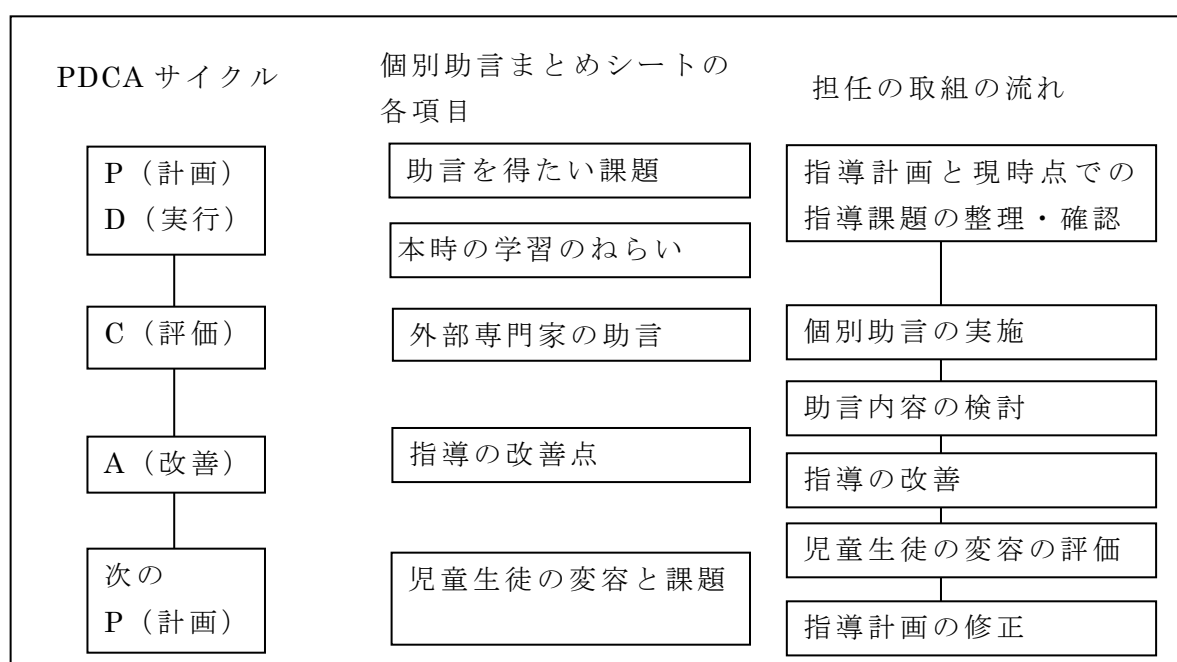


表 5

### イ 個別助言まとめシートの活用

シートの「助言を得たい課題」「本児の学習のねらい」は、PDCAサイクルで言えばP（計画）D（実行）にあたる過程に関する内容となる。「助言を得たい課題」「本時の学習のねらい」は個別助言実施前に担任が中心となって作成し、事前資料として外部専門家に送付している。個別助言終了後に担任は「外部専門家の助言」の欄で助言の概要について、「指導の改善点」の欄で外部専門家の助言を受けて取り組もうとする指導の改善点について整理する。これらはPDCAサイクルでいえばC（評価）A（改善）の過程に当たる。さらに「児童生徒の変容と課題」の欄には指導を改善して取り組んでからの変容や新たに生じた課題を整理する。外部専門家と担任及び関係職員で行う評価会では、全ての項目について作成したものを資料としている（表6）。

個別助言まとめシート

平成20年 7月 1日

対象児童生徒名（イニシャル表記）	T・A	学校担当者
<p>助言を得たい課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○食事について               <ul style="list-style-type: none"> <li>・姿勢（椅子の高さの調整等）</li> <li>・スプーンの握り方、補助具の活用</li> <li>・すくう動作の向上</li> <li>・とり込み動作</li> <li>・汁物の飲み方（れんげ、ストロー）</li> </ul> </li> <li>○衣服の着脱について               <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導内容の絞り込み</li> </ul> </li> <li>○トイレについて               <ul style="list-style-type: none"> <li>・便座前の方向転換</li> <li>・座り方、立ち方</li> </ul> </li> <li>○歩行について               <ul style="list-style-type: none"> <li>・後ろ倒れにならない歩行介助</li> <li>・安定した歩行を促すための指導</li> </ul> </li> </ul>		
<p>本時の学習のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○食事               <ul style="list-style-type: none"> <li>・自主的にスプーンを動かし、自分ですくったり口に運んだりする。</li> <li>・牛乳を自分で持ち、ストローを使って飲む。</li> <li>・汁物はれんげを使って、飲む（唇をすぼめて、すする）。</li> </ul> </li> <li>○歩行               <ul style="list-style-type: none"> <li>・後ろ倒れに鳴らないよう安定した姿勢で歩く。</li> </ul> </li> </ul>		
<p>外部専門家の助言</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○食事について：全般的に向上しているように見えた。一日1回でもじっくりと取り組む時間があることが向上につながっておと思うので、継続して欲しい。</li> <li>○衣服の着脱について：Tシャツを脱ぐときのような手を挙げて動かす動作は、日常生活であまりないと思うので、更衣の中で動かすことは良いと思う。現状維持を目標に、本児が協力するような動きを引き出せると良い。</li> <li>○歩行について：身長と体重の増加と脚のX脚の進行が原因か、歩行が不安定で、もつれている。6年前には必要なかった車椅子の必要性が出始めている。歩行についても、現状維持が目標になると思うので、場面によっては車椅子を利用したり、平坦な道や体調の良いとき、時間があるときなどはできるだけ歩かせるようにしてはどうか。後ろ倒れにならない歩行を得るために、バギーや台車を押して、前に体重をかけて歩かせるような練習を取り入れても良い。</li> </ul>		
<p>指導の改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○トイレ：バーや教師の肩・腕につかまる力がついてきているので、その力を活用する。</li> <li>○衣服の着脱動作：Tシャツの脱ぎ着では、時間がかかっても、本児の動きを見守る。</li> <li>○歩行：骨盤支援をしながらの歩行練習を行う。台車やバギーを押す練習を取り入れる。</li> </ul>		
<p>児童生徒の変容と課題</p>		

## ウ 評価会の実施

外部専門家の個別助言の内容を踏まえた指導によって、児童生徒がどのように変容したかの評価等を検討するために「評価会」を実施した（表 7）。

流れ	手順や配慮事項等	担当
前日までの準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シートを作成する。</li> <li>・シートを外部専門家に事前に送付する。また、印刷して全職員に配布する。</li> <li>・写真スライド、ビデオ、デモンストレーション用の遊具や補助具等を準備する。</li> </ul>	推進事業担当者、担任
当日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任の「指導の改善点」「児童生徒の変容と課題」の報告。</li> <li>・関係職員が参加してのケース検討。</li> <li>・外部専門家の指導助言。</li> </ul>	推進事業担当者、担任、部主事、関係職員
事後の整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価会での外部専門家の助言、協議を踏まえて「児童生徒の変容と課題」を整理する。</li> </ul>	推進事業担当者、担任

表 7

## エ 事例

担任が外部専門家から助言を得たい課題

VOCA やスイッチを使った遊びを行っていきたいと考えていえるが、頸部、肩周辺がかたく手が動かしづらそうだ。手を使った活動が楽にできるように、ゆるめ方や姿勢を教えてもらいたい。また、手の動きに限らず、本児が身体を動かしやすい動作や姿勢を教えてほしい。



PT の助言を受けて取り組んだ指導

- 座位保持椅子の点検と姿勢や緊張状態のチェック。
- 肩、体幹を安定させ緊張を低減する。
- 仰臥位で声をかけながら胸を開く運動を行う。下肢を屈曲させて丸めるような姿勢をとりながら正面を向く経験を重ねる。

OT の助言を受けて取り組んだ指導

- 手を使う活動の前に肩周辺の筋緊張をゆるめる。
- いろいろな姿勢や寝返り動作の中で上肢を動かす。
- 筋緊張の左右差を強めないためにポジショニングを工夫する。
- 本児の情緒の変動、室温や BGM などにも配慮して指導する。



#### 対象児の変容と課題

朝の会での係活動として、スイッチを置く台の角度を調整し、教師が本児の左肩に手を置いて圧を加えることで、スイッチを押す動作を引き出せることがあった。

自立活動の時間の指導では、音楽を聴く、バルーンで揺れるなど、本児の好きな活動と、肩周辺の緊張を緩める活動を組み合わせたことは有効であった。緊張が少し緩み、寝返りの動きや伏臥位での動きを取り入れると嫌がらずに取り組めることが多かった。

正面を向く姿勢をできるだけ経験させようとする際に、首にはできるだけ触れず、肩や上肢、下肢などをガイドすることで、過敏に反応することなく、自分で正面を向こうとする様子が見られた。

食事場面では、徐々に正面を向くように促しているが、まだまだ右を向いて食べていることが多いので長期的に取り組んでいきたい。

## 5 成果と課題

教員の事業に対する評価を把握するために「平成 20 年度実施した外部専門家活用事業についてのアンケート調査」を実施した（表 8）。紙面の都合上、長崎養護学校の結果について報告する。

全体では、8 割を越える教員が自立活動の指導に関する専門性が身に付いた、と肯定的に評価をしていた。また、肯定的な評価は、小学部と中学部で 9 割前後にのぼっているのに比べて、訪問教育担当教員では 5 割程度であった。このことから訪問教育担当教員のニーズの充足は十分ではなかったと思われる。肯定的な回答を上位から順に見てみると、実態把握の視点、設定した指導目標の妥当性、評価の観点など、手技だけの狭義な専門性だけではなく、仮説等で示した確かな教員の専門性にもつながっていったことがうかがえた。

研究の実際においては、特別支援学校の教員としての専門性とは何か、を考えながら、「パワーアップシート」や「個別助言まとめシート」の作成等の一連の過程をとおして、自立活動の指導における指導の充実につなげていくことができたという声が多かった。また、今年度は、研究体制の確立に時間をかけたため、実際に外部専門家から指導助言を受けたのは 9 月からであり、来年度は早い段階から専門的な実態把握の仕方や目標設定の方法について、指導助言を受けられるよう計画したいという反省も聞かれた。そして、今年度の取り組みでは、個別の指導計画をもとに自立活動の指導の充実にはつながったと評価できるが、それが個別の教育支援計画まで反映できたかということ、まだ不十分であろうと思われる。今後、特別支援学校の教員が、自立活動の指導における専門性が向上することで、個別の教育支援計画での連携先である医療機関等との連携がこれまで以上に密接になることを期待し、研究を推進したいという声も聞かれた。

設問 1 「本事業全体に関する各設問について該当する欄に○印を一つつけてください」 （「とてもそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階で評価する）		
児童生徒の変容	1	子どもの変容につながる助言が得られた。
	2	障害の進行や二次障害を抑える上で役に立つ助言が得られた。
	3	指導中の事故や子どものオーバーワークを防ぐ上で役に立った。
	4	子どもの学習意欲を高めるはたらきかけを考える上で役に立った。
	5	子どもの外界へのかかわりやコミュニケーションの力を育てる上で役に立った。
計画的指導	6	よりよい実態把握を行う上で役に立った。
	7	設定した指導目標の妥当性を検討する上で役に立った。
	8	授業や指導方法の改善に役立った。
	9	子どもの評価を検討する上で役に立った。
専門性の向上	10	重度重複障害児教育に関わりのある専門分野の知識・技能について知る上で役に立った。
	11	他職種と子どもについて情報交換する力を高める上で役に立った。
	12	補助器具や教具の活用について知る上で役に立った。
	13	障害に応じた学校設備や環境の整備について考える上で役立った。
	14	家庭と連携をとって指導を進める上で役に立った。
	15	他の機関と連携をとって指導を進める体制づくりの上で役に立った。

表 8

## 6 今後の展望

今回の研究では、特別支援学校の教員としての専門性について考える機会となった。外部専門家から指導助言を受けることで、自立活動の指導における充実が図れたことはシートの検証や専門性についてのアンケート結果より確かである。来年度は、「個別の教育支援計画」との関連性へ発展させていきたい。また、特別支援学校の教員としての専門性についてもっと考え、外部専門家の活用の在り方をこの教育活動の中のどこに位置づけていくかを明確にしていく必要もある。他にも、専門分野によってはチームを組んで（例：医師と療法士、歯科医師と歯科衛生士など）支援したり、視能訓練士、臨床心理士、音楽療法士、福祉関係者などの新たな外部専門家の必要性についても模索していきたい。